

第8回ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

◇実施日時	2022年11月10日(木)19時～21時
◇方法	ZOOMによるオンライン開催
◇参加者数	31名
◇内容	学習指導案の相互検討①

【ルーム1】担当：大西浩明

(1) 新城菜々子先生(沖縄県南城市立玉城中学校)

中学校3年生音楽科「ポピュラー音楽を聴いて、その特長を見つけよう」

「ロック」「ジャズ」「ボサノヴァ」の3つのジャンルはそれぞれ単独で存在しているのではなく、長い歴史の中で人々や文化の交流によって生まれたものであるということを理解しながら鑑賞を進めていく。

音楽はいろいろな要素が関わり合っていてできていることういお感じさせたい。

鑑賞で学んだ知識を生かし、音楽のよさを生徒それぞれの表現方法で表現させる

(ダンスする・絵を描く・批評文を書く・写真を撮る等)

それらを批評する活動を行うことでポピュラー音楽のよさを味わう

SDGsの何番と関連があるのか考えを述べ合い共有する

(主な意見)

- ・表現活動はどんなものが多かったのか？
→ 表現活動ではダンスも多かったが、インターネットから歌に合う画像を持ってきて、注釈文を書いた生徒が多かった。
- ・単元構想時に3時間だったが、なぜ9時間に？
→ 音楽だけで考えたら9時間は現実的ではない。他教科と絡めることでかなりおもしろい展開になると思うので。
- ・SDGsと音楽がこんなふうにつながっていくのが面白いと感じた。
- ・鑑賞と表現がこういうつながりになっていくのは斬新だと思う。

(2) 栗谷正樹さん

小学校4年生総合「未来の災害に備えよう～2つの石碑から考える減災教育」

大阪府内にある津波災害を扱った2つの自然災害伝承碑を減災教育の教材として取り上げる。

伝承がなかったために2度目の津波でも多くの犠牲が出てしまった。

石碑の碑文を毎年「墨入れ」してきた人の思いを考えさせたい

「自分たちも次の津波災害に向けて備えをする必要がある」ことを認識させたい。

津波高潮ステーションの動画と東日本大震災の体験談から、避難できた理由を共有。

家族間で決めたルールを全体共有し、災害時の避難についてのポイントを再確認する。

(主な意見)

- ・2つの石碑がいい教材なので、後ろの展開でも使えないだろうか。
- ・総合なので、もっと探究できる余白があってもいいかも。

- 他のところの石碑を調べて、「同じところ」「違うところ」を見つけたり。
- ・伝承していくことの大切さを考えるよりも、墨入れをしてきた人の思いに迫るものに。
- そうしたかったが、今年ずっと続けてこられた方が亡くなられたので。
- ・自校の避難訓練と比べていろいろな気付きをさせることが大事。
- 子どもから「こんな訓練あかんやん！」と言わせたい。

(3) 谷垣徹先生（奈良県立青翔中学校・高等学校）

高校3年生コミュニケーション英語「Is Palm Oil Really an Eco-friendly Product?」

オラウータンが生息するボルネオ島では熱帯雨林が破壊され、パーム油プランテーションが広がっている。

パーム油は、多くの商品（菓子類、インスタント食品、洗剤など）の多くに使用されている。

また、パーム油は貧しい地域の人々の重要な収入源となっている。

パーム油プランテーションが引き起こす環境破壊やオラウータンの減少などは、我々の消費生活と大きく関わっている。

「パーム油は環境にやさしい製品である。環境を取るか、絶滅の危機に瀕しているオラウータンの命を取るか。」と結ぶ教科書本文の記述に対しクリティカルな視点を持ち、環境保護と経済発展の両面から考えさせたい。

単元の目標、評価規準は、英語として？ ESDとして？

(主な意見)

- ・「A or B」と教科書が結んでいることを批判的に考えている点がすごい。
- 教科書さえ批判的に読むことが大事だと改めて気付いた。
- ・パーム油を巡る問題をまず関連図に表すと整理しやすく、考えやすいかも。
- ・今普通に使っているものでも、「よくないな」と思いながらどうしようもないものもある。
- そんなものを探してつなげて考えてみるのもいい。
- ・英語である限りは、やはり単元の目標、評価規準とも、英語として記載すべき。
- ESDに関わっては、「ESDとの関連」の項で詳しく書いてもらっている。

【ルーム2】担当：中澤静男

(1) 島俊彦先生（福岡県大牟田市立吉野小学校）

小学校5年生 総合「未来につながる 吉野小桜プロジェクト」

教員にとっての単元の目的 吉野地区のまちづくりに参加・協力しようとする態度を育成したい

①吉野地区ではなぜ、桜が有名なのか

吉野地区の第1期のまちづくりに関わった方々が、吉野のまちをよい町にしたいという願いを込めて桜をたくさん植樹されたのが始まり。

②現状について

- ・子どもにとって、桜がたくさんあるのが当たり前の風景となっており、桜に込められた願いには気づいていない。
- ・桜プロジェクトが10年以上前から5年生を中心に続けられている。子どもたちは5年生になったら桜プロジェクトに関わることができるという期待感よりも、「やらされ感」が強い。
- ・地元の桜プロジェクトのメンバーも、マンネリ化していること、コロナ禍でイベントができない

ことが続き、消滅してしまうのではないかという危機感、スタッフが高齢化している、という課題があることを認識している。

③ 2年前の授業実践との違い

- ・ 2年前の授業実践では、これまでの桜プロジェクトを引き継ぎ、「継承」に力点を置いた桜樹の保全や管理・植樹が中心であった。ところが児童にとって、桜樹があるのが当たり前になっており、守るべき存在であると認識することが困難であったようで、マンネリ化していた。
- ・ 今回は地域の桜プロジェクトの方々から直接児童に困っていることを話していただく機会を設定したことで、課題解決型の授業展開となり、児童の活動意欲も向上している。

④ ゲストティーチャー（地域の方々）との連携に関して

授業を通してどのような児童の変容を目指しているのかについて、教員の希望、本授業におけるG Tの役割と重要性など、かなり入念な事前打ち合わせを行った。台本を作成し、それに加筆修正を加える形で、学校側が期待する連携を進めた。

（2）長谷川かおり先生（奈良教育大学附属幼稚園）

未就園児親子クラスでの取組 「おべんとうごっこ」

① 今年度から未就園児（2歳児・1歳児）親子クラスを開始した。

- ・ 同じように子育てをする母親同士が情報共有する場
- ・ 少し年上の幼稚園児が生活する様子を見ることが出来る場
- ・ 子どもの成長を身近に感じることが出来る場：
- ・ 当初は各自で遊んでいた子どもが、みんなで活動するようになっていった。
- ・ 絵本の読み聞かせに参加し楽しめる子が増えてきた。
- ・ 保育者が未就園児と関わる様子を見せることで、子どもとのかかわり方、声のかけ方を伝える場

② 今回の保育を通した保育者の願い

- ・ おべんとうを作る行為を通して、相手の喜ぶ姿を見て自分もうれしくなるような体験をさせたい
- ・ 利他やCAREなど、ESDで育てたい価値観につながる保育

③ ままごと

- ・ 子育て支援の場で保育者が意図をもってままごとあそび（べんとうごっこ）を取り入れ、その際に保育者がモデルとなって子どもの内的活動に働きかけることによって、この活動で目指す親子の姿に大きく寄与できると考える。

④ 展開の工夫

- ・ 保育者がごちそうの入った弁当を用意して、子どもたちの目の前で食べることで、自分も食べたいと思えるようにする。
- ・ 子どもたちそれぞれに中身の入ったお弁当箱を用意しておき、ふたを開けるときのわくわくした気持ちが味わえるようにすることで、食べたい気持ちや自分でも作りたい気持ちが高まるようにする。
- ・ 食べたら「おなかいっぱい」と言って、かごに戻すことを示し、そのかごの周りで、それぞれが弁当を作ることを楽しめるようにする。

大好きなお母さんのためにお弁当をつくる活動

- ・ 個々の子どもの思いをくみ取って言葉にしたり、お母さんが待っていることを伝えることで、お母さんのことを思って作れるようにする。

- ・お母さんが喜んでる様子を伝え、お母さんが喜ぶ様子を見て嬉しいと感じられるようにする。

⑤感想

- ・保育者が母子のかかわりのモデルを示している。
- ・子どもを認めるという子どもとの接し方に感心した。認められることで子どもが成長するのは中学生も同じだと思った。
- ・丁寧に保育することで、子どもの成長への気づきも多くなると思った。

(3) 長塩里音先生（福岡県大牟田市立大正小学校）

小学校 5 年生総合 「フラワータウンプロジェクト」

①課題

地域の人と一緒に花を育てる活動だが、当初の意図も熱も伝わっておらず、形骸化している。子どもには「やらされ感」しかない。

②単元計画した願い

フラワータウンプロジェクトが「笑顔で済み続けられるまちにしよう」という意図で続けられていることを子どもたちに伝え、積極的にかかわる姿勢を育てたい。

③フラワータウンプロジェクトの意義

- ・「花」を媒介とした「人と人のつながり」を体感することができる
- ・「花」を通して、自然環境に関わる体験をすることができる。

④指導上の工夫

- ・フラワータウンプロジェクトを市民によるまちをよくする活動の一つとしてはじめられた磯畑氏と子どもたちが会おう場を設定する。磯畑氏の生き方を知った子どもの「あこがれ」からの行動変容意を期待する。
- ・花を育てるだけでなく、フラワータウンプロジェクトで募金活動を行い、昨年度から学校と関係をつくりつつあるキリバスを支援することで、温暖化の現状など、世界に目を向けさせる。
- ・地域の松原中学校にも協力を依頼し、連携して取り組めるようにしたい。

【ルーム 3】担当：河野晋也

(1) 品川崇先生（愛媛大学教育学部附属小学校）

小学校 5 年生社会科 「米づくり」

実践の概要

5 年生の社会科米作りの単元での実践。1 学期から始めたバケツ稲の取組や、同じ 10a あたりでも松山市と庄内平野とではコメの収穫量が大きく違うこと、などを切り口に農業の大変さに気づかせていった。また、より安全安心なコメ作りのための取り組みとして、愛媛大学農学部の「安心米」を紹介した。石油から作られる窒素肥料を使わず、シロツメクサが窒素固定をすることを生かして肥料を使用して生産されている。しかし実際にはなかなか農家に広がらないという現状があり、子どもたちの思考を揺さぶる教材となっている。

質問や感想

- ・JA や大学の研究者など様々な人と出会っていることは、大変な苦勞だと思うが、とても良いことだと思う。安心米について、実際の農家の話を聞くことはできないのか。
→ 農家の話をどのように取り上げていくかという点は、この実践の課題。近くに農家が少ない。

また JA の方としても収益の保障などを考えると、容易に安心米などの新しい取り組みを進めがたいという事情もある。そういった一歩踏み込んだ話を聞かせてあげられたら、と思う。

- ・ゆさぶりがうまれるように、たくさんの種を先生がまいていることが素晴らしいと思う。多様な人に声をかけて、話してもらうのもそのための取組だったのだなと思った。

(2) 先野文先生 (愛媛県松山市立内宮中学校)

中学校総合

みんなで地域(北条:市町村合併で松山市に)の活性化のためのアイデアを考える実践。本実践では、特に鹿島という島に着目してその魅力を探っていった。この島は、昔は多くの人が訪れ、海水浴場や昔ながらの祭り、また鹿をはじめとする動植物も豊かに残っているが、現在ではあまり地元の人も行くことが少なくなっている。そこで、鹿島を舞台に地域おこしをするとすれば、どのような事業をすることができるかを考えていった。生徒からは、おしゃれなカフェ、パン屋のような中学生らしいアイデアや海辺でのヨガ、観光船、お年寄りと一緒に楽しめる機会を作る事業など、地域の特性を生かした様々なアイデアも出された。

質問・感想

- ・教科担任制が実施されている中学校では、それぞれの ESD 実践はどのように共有されているのか？
→勤務校が金融教育の取組をしており、その中にはキャリア教育や SDGs と関連するものも多かったため、複数の教員が SDGs に関する取組に関心を持っていた。この授業の場合は、何らかの形でプレゼンテーションを作成・発表させる取り組みを国語でやろうとしたところ、社会科の先生がコーディネートしてくれるようになり、理科の先生が関連する内容の授業を持ち時間でしてくれる、というように自然と関連づいていった。
- ・子どもたちは北条のまちについてどのような捉え方の変容があったのか
→地域おこしについて、明確なイメージはわかかなかったようだ。ゲストティーチャーの話聞くことで、地域のこれからについて前向きに捉えていくようになったと感じている。
- ・ぜひ最後に発信するチャンスがあればよいなと思った。
- ・町おこし、地域の活性化を考えると、どれくらい鹿島のことを知って、その良さを生かすような事業を考えるかが重要だと思う。ただ人を集めればよいというのではなく、子供たちの意見にあるように、島の特徴を生かした、鹿島だからこその事業が考えられることがいいなと思った。

(3) 中澤哲也先生 (大和郡山市立片桐西小学校)

小学校 3 年生社会科「郡山市の金魚」

大和郡山市は、全国的に有名な「金魚のまち」といわれるが、なぜ有名なのか、金魚と関わる人がどのような取組をしているのかを詳しく知っている子どもは少ない。そこで、実際に金魚を飼育したり、金魚マスターの方と出会ったりしながら、その歴史や種類などについて学んでいく。また、なぜ金魚マイスターになろうと思ったのかという質問から、「町を大切にしたい」という願いに気づかせようとした。今後は、金魚ストリークの発案者の方に話を聞かせてもらう予定をしている。このインタビューを通して、金魚マイスターとの共通点を考えさせ、自分たちのまちをよくしようとする思いについて気づかせていきたい。

質問や感想

- ・非常におもしろい教材だと思う。金魚の学習になってしまっただけではいけないと思う。その点で、人に

出会わせて、生き方に触れさせていくことがよい手立てだと思う。

- 金魚の学習でありながら、街づくりの学習になっていることが良いと思う。二人のゲストをとおして町に住む人たちの思いや願いにも迫っていけると思う。